

の土台を問い直すような検討も不可欠ではないか。

加えて、歴史記述で1986年の民主化革命に触れているので、これを記念して建てられたエドサ大聖堂の上に屹立する「エドサの聖母像」についても触れるべきではなかったか。この像のもつ政治的な含意についてはクラウディオによる鮮やかな分析がある[Claudio 2013]が、そこには街の景観やその中における聖像の美術的（あるいは図像学的）な考察はみられない。著者による今後の取り組みに期待したい。またローカルな文脈での聖母像も政治性を帯びるという点は、第4章の叙述から明らかである。バランガイ・サン・ピルヘンの創始者が、共産主義に対抗するため、共産党の組織のあり方を参考に活動を作り上げた点の指摘があるが、これを大地主制の社会矛盾というローカルな文脈や冷戦下のカトリシズムと共産主義という国際的な運動同士の対立と交渉という文脈に乗せて、聖像の置かれた位置を考察する余地もあるのではないか。

以上の課題も、本書の成果や意義を踏まえたところから生じるものであり、本書の価値を減じるものではない。本書は宗教実践や美術に関する新しい研究領域を開いており、著者や評者自身を含めた研究者たちに多くの課題を投げかけている。

引用文献

Bautista, Julius. 2019. *The Way of the Cross: Suffering Selfhoods in the Roman Catholic Philippines*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Claudio, Lisandro E. 2013. *Taming People's Power: The EDSA Revolutions and Their Contradictions*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.

De La Cruz, Deirdre. 2015. *Mother Figured: Marian Apparitions and the Making of a Filipino Universal*. Chicago and London: University of Chicago Press.

清水 展. 『噴火のこだまーピナトゥポ・アエタの被災と新生をめぐる文化・開発・NGO』(新装版), 九州大学出版会, 2021年, 392 p.

土田 亮*

本書は1991年6月15日に起こったフィリピン・ルソン島西部ピナトゥポ山の大爆発を契機に、「甚大な被害をこうむった、先住民アエタの被災と生活再建の歩みの記録であり、それに関わった私自身の関与についての自省と総括であり、(中略)被災を契機として彼ら彼女らが先住民としての自覚を強め、民族としての再生あるいは新生と呼びえる状況を作りだしてきた経緯についての報告と考察」(p. 1)であり、著者が10年以上にわたって現地に赴き、現場の行き詰まりを切実にまとめた労作である。なお本書は2003年に刊行された同題本に、新装版あとがきと前書きのカラー写真を追加したものである。

本書は序論・結論を合わせた8章から構成されている。以下では、本書の構成について紹介する。

第1章「序論」では、本書が出版される

* 京都大学大学院総合生存学館

に至った経緯が述べられている。著者の活動記録や観察記録を概観しつつ「ホームとフィールドの往還を繰り返す」(p. 16) 人類学者の思索と反省の記録であることも吐露している。そのうえで、現代における関与することの人類学のあり方をめぐるひとつの主張の書として本書を位置づけている。

第2章「ピナトゥポ大噴火とアエタ民族の危機—運動の言説をめぐる内省」では、著者が噴火後のアエタ救援・支援活動に巻き込まれ、実践的に、ときには煽動的なかたちで支援に携わる中で、「民族としての存亡の危機」という運動の言説を主張し続けたことへの反省と分析がなされている。著者は民族存亡の危機を代弁したことを、単に自己批判するのではなく、地域の歴史と政治が結びついた伝統文化や民族の動態を他者がどのように表象できるのかという、人類学そのものが直面している課題に関わるものであると、アイスやインディオの事例も参照しながら指摘している。

第3章「他者を表象すること—フィールドワーク・民族誌・コミットメント」では、サイドのオリエンタリズム批判以降の人類学者の態度を標榜しつつ、異文化を活写するという人類学のテーゼをめぐる学術的論争に言及しながら、著者がアエタ社会に関わることや描くことの責務を述べている。アエタへの援助がキリスト教のチャリティーに基づいているとしても、「未開で遅れた哀れなアエタたち」という平地民の無知と偏見を含んだ表象や、憐憫や好奇心、尊大さが混じった態度が、アエタたちを傷つけたり困惑させたり

していた。支援や通訳などに携わった著者は、その責務として、現場で自らの身体をもって経験することを通して、自己の葛藤や彼ら彼女らの窮状と徹底的に向き合うことが重要であり、そこに人類学者の新たな可能性があると考察している。

第4章「噴火と想起—彼らの語りに耳を傾ける」では、噴火と避難生活についてのアエタたちの語りで構成されている。そこから浮かび上がったのは、被災、避難、再定住に際してのアエタたちの苦悩に満ちた体験であった。人々が逃げ込んだ洞窟に火砕流が流れ込み、失われた命を目の当たりにした者、平地民とともに暮らすことに適応できずに苦しんだ者、避難所から戻っても土地や農地が一掃されており、生活再建の見通しがつかない者などの物語が綴られている。それが苦難と困窮、不穏な様相に満ちたものであったかを、ありありと読み手に語りかける。一方で、被災者であるアエタが自らの窮状を語ることを通じて民族の自覚を生み、驚きと喜びが入り混じった感情をもちつつ明確な意識変化がアエタたちの中で生まれたと著者は説明する。

第5章「開発介入の理念と歴史—人類学そしてピナトゥポの現場から」および第6章「被災の苦難を超えて—生存戦略と民族の新生」では、ピナトゥポ山の噴火前後に、アエタに対して外部社会からもたらされた開発・復興プロジェクトの分析とその批判がなされている。第5章では人類学の関与と開発をめぐる問題群を検討し、第6章では生活を取り戻す中での組織化に注目している。

これらの章では、開発に巻き込まれる少数民族・先住民が生活の再建過程や政治的な自覚をもつことを通して、自主的で内発的な発展の主体へと変容していくプロセスが描写されている。この過程が下敷きにあつて、はじめて「開発の目的が、(中略) 差異を生きる人々の多様性の混融と共存を目指すものでありうる可能性」(p. 150) をもつと著者は提示している。

第7章「自立の模索・先住民の自覚—リーダーたちの声」では、第4章に続きアエタ自身の語りに戻る。ここでは連盟や協会の立ち上げや先住民の運動など異なる活動戦略をとるリーダー5人のインタビューが記録されている。これらの声に加え、著者による先住民権利法と鉦山法に対する補足と批判的解説を通観することで、先住民が自立の方途をいかにして獲得し、自民族としての自覚をもつに至ったか、そして脱植民地化に抗う姿勢を浮き彫りにした。

第8章「結論—民族の新生と文化・開発・NGO」では、アエタ社会の再編と権利意識への目覚めと異議申し立て、エンパワーメントのあり方、NGOとの利害関係、人類学における民族や出来事を記述することに対する著者ならではの回答と可能性を提示している。

以上が本書の概要である。今日改めて本書を取り上げるにあたり評者からコメントをいくつか付したい。

まず、本書の重要な意義として、「民族や文化の捉え方」と「創造的復興」の2点についての考察を挙げる事ができる。前者に

関しては、先住民としての覚醒と主張を通して、先住民や文化が実体化あるいは実在化したことを捉えたことはユニークである。かつて民族や文化は静態的あるいは固定的なものであるかのように記述されることがあったが、本書では災害による伝統的な生活や生業、土地利用の歴史変容を通して民族や文化をアエタ自身が主体的かつ内発的に捉え直していく過程を明らかにした。これは著者が一貫して関心を抱く「出来事を受容と懐柔をとおした社会や文化の変容と持続」(p. 25) に当てはまるだろう。また、第3章の最後にある「関わりや関与を通して、近現代世界と周辺地域との接合と摩擦の現場から、世界の捉え直しと作り直しの方途を探っていくことの意味」(p. 105) という問題意識も示唆深い。今日、研究者など外部の者が民族・文化・宗教・マイノリティなどを代弁・表象する際に直面する二面性、すなわち、権利主張と分断について、現場の人々にいかに関与することができるかを出発点として考察した本書を通して、分断や対立を生み出すことなく民族や文化の意味を再考し実践することの重要性を痛感した。

また、創造的復興、いわゆるレジリエンスに関して、「地域を/で研究する」地域研究ならではの視点から画一的でない復興のあり方を照射したことは意義がある。大規模な災害によって社会経済インフラと生活基盤が破壊された後、被災者が旧来のシステムや慣行、生活様式の継続が困難な状況から立ち直るとき、新しい生業と生活スタイル、自己意識、時間・歴史認識、地理・空間認識を獲得

する。そうして新しい人間・社会へとになっていくことを著者は新装版あとがき「噴火から30年一再び、変化と持続をめぐる」において「創造的復興」と呼んだ。本書の内容に引きつけていえば、アエタ民族が創造的復興を可能にしたのは、過去と未来の間の中に今を位置づけたこと、加えて国を跨いだネットワークの支援を利活用し地理的・空間的認識を拡大させたことにあった。著者は別の論集でも新しい人間・新しい社会の創造を考究しており〔清水・木村 2015〕、今日のハード対策一辺倒な復興に対して、個々の生を支える創造的復興のあり方についての研究が、本書を契機に展開しつつある。

こうした鋭い視点を有している本書であるが、欲をいえば、さらなる展開をみたかった点がひとつある。それは他のアクターとの地続きの相互作用である。つまり、本書では被災したアエタたちの先住民であることの自覚は十二分に描写されていた一方で、平地民アエタやフィリピン人との邂逅、また開発に携わったNGOの視点についての記述と分析が物足りないと感じた。確かに、本書では、人類学の課題に対して、先住民の苦悩や新生の記述と分析、また著者の内省を通して果敢に挑戦していた。しかし、アエタと他のアクターとの相互作用については、断片的な記述に留まっていると感じた。社会経済・政治の動態に加え、さまざまなアクターの様相や声を描写することで、先住民の自覚に加え、内発的な文化の発展をより際立たせて照射できたはずである。開発や民族自覚の章もあったがゆえに、後景化しがちなこれらの視

点や語りもあれば、より重層的に文化そのものや創造的復興に迫り、浮き彫りにできるのではないかと評者は感じた。

さて、いくつか評者が感じた点を挙げたが、インゴルドが唱える「人々についての研究」から「人々とともに研究する」姿勢、学問の礎へと転換する不屈の精神〔インゴルド 2020〕にも似た、先駆的な著作であったと感じる。改めて強調しておく、本書の今日における意義は、ピナトゥボ大噴火から30年をかけて、アエタ民族だけでなく時を経て変容してきた自己とも対峙し、内省しながら、コミットする人類学の方向性を打ち出したことにある。ホームとフィールドを往還し、応答しつつ、人類学の系譜に紐付けて自己内省する姿勢は、地域研究者にとって人のふり見て我がふりを直す写し鏡のような存在であり、読み手に深い共感を呼ぶ。今日も通奏低音として鳴り続けるこだまの実相、そしてともに苦悩しながら応答する姿勢を、ぜひ本書を手にとって読んでいただきたい。

引用文献

- 清水 展・木村周平編. 2015.『新しい人間, 新しい社会—復興の物語を再創造する』災害対応の地域研究 5. 京都大学学術出版会.
インゴルド, ティム. 2020.『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子訳, 亜紀書房.